

令和7年度

三縄小学校
「学力向上実行プラン」

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

○各教科等の特質を活かし、子どもの「やりたい」という気持ちを引き出す授業の実践
○互いに認め合い、話し合い、学び合える授業の実践

校長

藤岡 浩

学力向上推進員

伊勢 あい

【各校の取組状況の把握について】

◎次の（１）～（３）をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

相互参観授業や、研究授業を行い、実践方法や子どもの変容を共有する。

（１）知識・技能の習得

児童生徒の状況（○よさ・●課題）	具体的目標（目指す子供の姿）	具体的方策（教員の取組）	中間期の見直し	達成状況（評価）	次年度における改善事項
○課題に対して真面目に取り組む児童が多く、基礎的・基本的な知識・技能が身に付きつつある。 ●文章を正しく読み取ったり、身に付けた知識等を関連付けたりすることに課題がある。	・読み書きや、計算の基礎的・基本的な知識・技能確実に身に付ける。 ・文章を正しく読み取ったり、身に付けた知識や技能を活用して学習に取り組むことができる。	・タブレットアプリを活用し、既習の四則計算や、漢字を練習する時間をとるようにする。 ・児童の苦手を自分自身で把握し、自分に合った家庭学習を週に1回程度実施する。 ・「あわスタ」を活用し、児童の学習との関連付けをする。	・高学年で週に1回程度、「鳴潮書き写し」を行うことで、様々な文章に触れることができるようにする。 ・スモールステップで読み取る文章問題のプリントに取り組ませる。	・毎週木曜日に「ステップアップ学習」に取り組むことで、自分に必要な力を身につけることができてきた。 ・正しく早く読む音読を継続して行ったことで、文章内容を正確に読み取ることができるようになってきた。 ・国語の学習で身につけた知識・技能を、他教科の発表の中で関連付けることができてつつある。 ・「あわスタ」を活用したことで、書き写した文章の間違ひを見つけて訂正することができたり、普段使わない言葉に触れる機会が増え語彙が多くなってきたりしてきた。	・タブレットでは漢字を使って文章表現ができているが、実際に「書く」活動になると、既習の漢字を使えないこともあった。キーボード入力と書く活動のバランスを考える必要がある。 ・計算力にはまだ課題が残る児童が多いため、授業前に数問の計算問題に取り組む時間を設ける。

（２）思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況（○よさ・●課題）	具体的目標（目指す子供の姿）	具体的方策（教員の取組）	中間期の見直し	達成状況（評価）	次年度における改善事項
○自分の気づきや考えを相手に伝えたり、聞いたりすることができる。 ●自分の思いや考えをまとめて、相手にわかりやすく表現することに課題がある。	・学んだことを適切な文章で表現することができる。 ・互いの意見を比較したり関連付けたりすることができる。 ・めあてを意識しながら学習に取り組み、自分の学びについて振り返ることができる。	・自分の考えを文章にまとめる時には、ペアやグループで話し合う時間を設け、理由や根拠を説明することができるようにする。 ・各教科の特質に応じて、具体物の操作やICT、体験的な活動などに取り組ませることで、学習したことを振り返ることができるようにする。	・条件に合わせて自分の考えをまとめたり、目的・状況・場面を意識させながら文章に表したりする活動に取り組ませる。 ・モデル文を見ながら、自分の考えを理由を含めて作文を書く活動に取り組ませる。	・高学年では「鳴潮の要約」を行ったことで、文章表現が豊かになり、条件に合わせた文章が書けるようになった。 ・グループで話し合う時間では理由を伝えながら、自分の思いを分かりやすく伝えることができるようになってきた。 ・テーマに沿った自分の意見文を書くという活動で、理由を挙げながら相手に伝える文章が書けるようになってきた。 ・国語の時間には、毎時間ノートに自分の考えを書く時間を作ったことで、短い時間で文章が書ける力が身に付いてきた。 ・学習のめあてに沿った振り返りができるようになってきた。	・相手に分かりやすい文章を書くために、継続的に自分の文章を読み返したり、推敲したりする習慣を身につける必要がある。 ・他者の意見と自分の意見を比較することにはまだ課題が見られるので、学活などで話し合い活動を充実させていく必要がある。

（３）主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況（○よさ・●課題）	具体的目標（目指す子供の姿）	具体的方策（教員の取組）	中間期の見直し	達成状況（評価）	次年度における改善事項
○各授業に一生懸命取り組むことができる。 ○すすんで読書に取り組むことができる。 ●苦手な課題や難しい課題に対して、粘り強く取り組むことができる児童は少ない。	・自らめあてをもち、よりよい解決方法を自分なりに考えながら課題に粘り強く取り組むことができる。	・地域の良さを活かした活動や、体験活動の充実を図るとともに、児童にまかせ、主体的に判断する機会をつくる。 ・教科横断的な学習を取り入れることで、児童の学びや経験から学習のプランを立てることができるようにする。	・学習に主体的に取り組めるように、学年段階に応じた単元計画を提示し、学び方を選んで学習を進める環境を整える。	・高学年では、自由進度学習を取り入れたことで、子ども主体で学習を進めることができるようになった。 ・生活科や総合的な学習の時間において、自分でめあてをたて、ゴールに向かう姿勢が身につく始め、他教科でも粘り強く学習に取り組むことができるようになってきた。 ・中学年では、課題解決をグループ活動で行うことで、自分達で問題解決しようとするようになり、「みんなで頑張っ取り組もう」とするようになってきた。	・子ども主体の学習は、生活科・総合的な学習の時間を軸に、どの教科でも取り組んでいけるように、学校全体で進めていく。 ・スモールステップで学習を進め、成功体験を積むことで、難しい課題にも意欲を持って取り組んでいけるようにする。